

平成 26 年度 「マレーシア工科大学への短期派遣」 公開報告書

生命環境学群生物学類 1 年

下城 彩

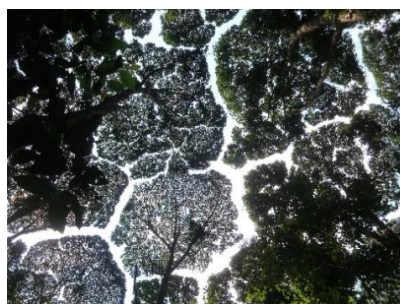
【背景】

筑波大学では現在マレーシア工科大学 (UTM) と提携し、UTM 内のマレーシア日本国際工科院 (MJIT) にクアラルンプールオフィスを設置している。今回の 8 日間の短期派遣は筑波大学マレーシア工科大学研究教育交流活動の一環である。また本プログラムの直前には、さくらサイエンスプランにより 10 名の UTM 学生が筑波大学を訪問しており事前交流を行うことができた。

【実施内容 概要】

- 3 月 13 日 (金) クアラルンプール到着
- 3 月 14 日 (土) マラッカ訪問
- 3 月 15 日 (日) マレーシア森林研究所 (FRIM)・クアラセランゴール国立公園
- 3 月 16 日 (月) MJIT 訪問・リトルインディア見学
- 3 月 17 日 (火) プトラ大学訪問・マンゴスチン加工工場見学
- 3 月 18 日 (水) マラヤ大学訪問
- 3 月 19 日 (木) マラヤ大学での研究発表会・プトラジャヤ見学
- 3 月 20 日 (金) 帰国

3 月 13 日は夕方にクアラルンプールに到着した。翌二日間は休日であったため、異文化体験とマレーシアの自然環境について理解を深めることを目的にマラッカ、FRIM、クアラセランゴール国立公園を訪れた。マラッカ見学は学生のみであったが、15 日は終日、地元の方が案内をしてくださり自然ばかりでなく現地での生活の一端に触れることもできた。夕方には川の支流の奥に作られた船着き場から、様々な魚、鳥、大型のトカゲやカワウソといった現在も天然林が保存されている区域ならではの動物を目にした。また夜には案内の方の紹介で船の上からホテルを観賞する機会もあり、多くのホテルが川岸の木にとまって明滅を繰り返す様子を間近に見ることができた。このように現在も豊かな自然が残され、対岸には夜も煌々と輝く町が広がってはいるながらも、人々が漁をしながら川と共に暮らしている様子を見ると、日本の都市部の川を見ながら育った私の中ではやや楽観的な気分が支配的になっていた。しかし案内の方は繰り返しホテルが減少していることを心配しており、急速に都市の拡大が続いているクアラルンプールの様子を思い出して複雑な思いになった。



【左から】 ジョンカー・ストリート (マラッカ)、FRIM、マングローブ林)

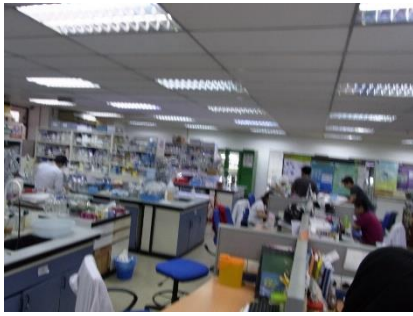
翌日からはマレーシア工科大（UTM クアラルンプールキャンパス）、プトラ大、マラヤ大と多くの大学を訪問する機会に恵まれた。特に UTM では開講式の後、筑波大から赴任している原先生の授業を聴講する機会があった。時間の関係で今回はこの一回しか授業見学はできなかったが、英語で行われる授業の様子や学生の反応などを直接知ることができ興味深かった。また、この日は直前のさくらサイエンスプランに参加していた学生の一人が KL セントラル駅近くのリトルインディアを案内してくれた。短い時間ながらも詳細な解説のお蔭でマレー系のものとは異なる文化について理解を深めることができた。翌日のプトラ大訪問では、食品科学という私にとってはやや異なる分野の研究室を見学したが、ここでも学生が親身になって案内をしてくれた。またハラフードにも関わる研究が行われているとのことで、当初はマレー系の人々が主体ではと予想していたが、実際には特に宗教的なタブーは少ないと思われる中華系の学生が多かったのも興味深かった。



【左から】 MJIT (UTM クアラルンプールキャンパス構内)、プトラ大学)

18日はさくらサイエンスプランで白岩・鈴木研に滞在していた UTM の岩本研所属の学生と共にマラヤ大を訪問し、藻類が専門の Fang 教授の研究室を見学した。設備も筑波大同様充実しており、また現地ならではの研究課題として養殖エビ用のワクチンの生産などにも取り組んでいるということだった。学群生とはいえ海外の研究室の様子を知ること、そうしたチームと今後張り合っていく行かねばならないことも自覚させられた。また、これは今回訪れた研究室の多くに共通しているが、研究室の作業スペースが広くとってあり明るく良い雰囲気であった。また Fang 研にはマラヤ大の藻類を対象とした研究が集められているようで、専門ごとに分かれている筑波大とはまた異なり興味深かった。最後に Fang 教授が送ってくださった、マレーシア国内だけでも様々な研究室が既に同じことを競いあうように研究している、それは大切なことではあるが、あなたたちは同時にもっと違うことにも挑戦すべきだというメッセージも印象的であった。結果を期待できる研究でももちろん重要ではあるが、新しい技術を取り入れ創造的な研究を行うことの重要性をあらためて意識した。

マラヤ大からの帰りには、岩本研の学生がセントラルマーケットに連れて行ってくれた。マレー系の文化が色濃く反映されている様々な店は前日のリトルインディアともまた異なり面白かったが、そぞろ歩きをする中で一人がふと、マレー系・インド系・中華系それぞれの民族衣装がデザインされたマグネットの前で立ち止まり、“One Malaysia” を象徴しているよ、とわざわざ見せてくれたことが心に残った。彼らにとってもこうした多民族社会は当然のことではなく、様々な葛藤を抱えつつも大学生活や普段の生活を送っていることを垣間見たように思える出来事であった。



(マラヤ大学 Fang 研究室にて)

最終日は午前中にマラヤ大で研究発表会を行い、午後はプトラジャヤの世界最大の人口湿地や果樹の研究施設の見学をした。研究発表ではマラヤ大構内の池の水質問題を通じて水問題の啓発活動などを行っている学生の話を知ることができた。興味深かったのは、水質浄化、汚水問題といったことに対し、水質改善から地域の子供たちに水に親しんでもらうための企画まで、理系文系を融合し大学内にとどまらず多角的なアプローチを学生自ら進めているとのことだった。日本の場合、良くも悪くも環境問題に対してある程度のイメージが社会の中に浸透しつつある。そのためか個人のアプローチの仕方は、専門化するかごく中途半端なものになってしまうかというマイナスの先入観があったのだが、彼らからはそうしたものをあまり感じなかった。圧倒的な経済発展と都市化の中で、まだやはり環境問題に対する認知が高くない分、かえって既存の取組を参考にしつつも、新しい方針にエネルギーに挑戦できるのかもしれない。

最後に筑波大 KL オフィス長の杉浦先生をお迎えして閉講式を行い、空港に向かった。今回は一週間、様々な方の惜しみない協力により大学のプログラムならではの刺激的で深い研修ができた。初めての海外体験にしてこうした機会に恵まれたことは本当に幸運であり、今回の経験をぜひ大学生活と今後の研究につなげていきたいと思う。



(【左から】 ペトロナスツインタワー、開発が進むクアラルンプール、KLCC のビル群と道路沿いに残る巨大な樹)

【今回の派遣を終えて】

改めて今回の派遣を振り返ると、本当に数えきれないほどの貴重な経験に恵まれたことを感じる。まず、日々拡大と都市化の進むクアラルンプールの町は外から訪れた者にとって魅力的ではあるが、同時に様々な問題も感じられた。特に環境問題はやはり今後大きな問題となってくる事が窺われた。クアラセランゴール国立公園でのホテル観賞時に聞いた地元の人々の話や、最終日のマラヤ大での研究発表会

で聞いた池の水質改善のための取組み、霞んだクアラルンプールの空など、日本の研究・技術と実績が既に活かせるはずだと感じる分野も多い。ただし、マレーシアの社会問題を知るうえでは今回のようにいずれ宗教を含めた異文化理解も不可欠になってくるだろう。私自身もそのように考えがちであるが、理系においては研究室の活動が主体となりやすい。特に実験、論文…と世界水準をクリアすることは、一方で均質な世界が研究室に広がることも意識しなければならない。今回の派遣を通じて、都市開発・技術提供などでの協力は容易かもしれないが、これからはお互いの生活や社会を知ることにより、よりタイムリーかつ将来性のある研究分野を立ち上げていけるだろうと思った。

また、派遣の直前に、さくらサイエンスプランにも関わられたことにより得たものも大きいと感じる。プログラム参加前は、英語教育や異分野交流、そして文化体験と、自分が目的だと考えていたものはごく細分化されたものであった。しかし、実際に UTM からの留学生と過ごし、さらに彼らの国であるマレーシアで一週間過ごす中で、最も印象的であり、自分が知りたいと考えていたことの基盤にあるものはやはり学生・先生方、そして人同士の交流の仕方、社会のあり方であったと考えるようになった。

特に印象的であったのは、マレーシアの人々が、積極的に自分たちの習慣や文化について積極的に語ろうとしていたことである。私自身もさくらサイエンスプランで受け入れ側を経験し、週末は留学生を案内する機会もあったが、その時強く感じたのが、自分たちの生活や慣習をどのように伝えていくべきか、ということであった。現在も私たちの多くは、「日本文化」としていわゆる伝統的な事物を真っ先に挙げようとするが、実際に案内をしていると、自分の普段の学生生活の中では久しくそうしたものから遠ざかっていることに気づかされる。宣伝されている、すなわち相手の持っている「日本」のイメージと、それに沿った説明をしながらも自分の生きている現代の社会とのギャップに戸惑う感情とがぶつかるのである。伝統文化、あるいは最先端のものに触れてもらうことはそれだけでも十分価値のあることであるが、ツアーガイドとしてではなく一人の学生として、それだけを切り取って伝え続けることに違和感をもつことも事実である。それに引きかえ、マレーシアでは生活の中に伝統がまだ色濃く残っており人々はそれを自分の言葉で語ろうとしていると感じた。勿論私の場合は今回が初めての海外体験であったために一層差を感じた部分もあるかとは思いますが、現地の人々の流暢な説明はそれ以上に経験に裏付けられたものがあり、それこそがマレーシアの多民族社会を維持する知恵であり努力であると思った。特に宗教が生活習慣に及ぼす影響は大きい。食事、祈祷の時間、といった一個人の生活の中に収まらない習慣が多く、社会を形成する基本としてお互いに守るべき点をはっきりさせる必要があるのではないだろうか。またそれと同時に、それぞれが自身の文化に意味を見だし愛着を持っていることもよく伝わってくる。さらにこうした越えられない線があることをお互いに認め合いながら一つの社会を維持していく必要のあるマレーシアの人々も、長い歴史がありマラッカの事例のように様々な文化の影響を受けてきたとはいえ安定しているわけではなく、常に意識的に生活していることも、現地に行くと漠然とではあるが感じた。そしてそうした緊張感の中で生活しているからこそ、私たちのような訪問者に対しても、またたとえ英語であったとしてもごく自然なこととして語りだすことができるのではないだろうか。一方で日本において、自分自身は何を切り口に自分の生活している社会を伝えていくのか、考えるきっかけとなった。